

酪農業を営む

看護師の取り組み

全国訪問ボランティアナースの会

「キャンナス釧路」竹内 美妃 代表

（国際緊急援助隊医療チーム登録
看護師・酪農家II竹内牧場代表）



＝Think Globally, Act Locally＝

地球的規模のレベルで考えて、地域レベルで行動しよう

徐々に全身状態が悪化してきて、なるべく自宅で過ごしたいトヨさんは、いつも「大丈夫、大丈夫。何とものない」と気丈に振る舞っていました。そんなトヨさんの気持ちも受け止めながら、いずれ訪れる最期についての思いを、家族に確認しました。

家族は、このまま状態が落ち着いていけば自宅で静かに過ごさせてあげたいと思うものの、状態が悪くなった時、どんな状態になったら連絡して、病院へ行ったら良いのかという不安を抱えていました。

私は、K先生に自分の考えとして「病院でよくいう、排尿がなくなったら、とか、血圧が50以下になったら、という基準で慌てて病院へお

と、遠方のため天候上等困難な場合も考えられるので、かろうじて体力のある、体調の落ち着いているうちに、入院療養へ変更したいことが最善、と結論付けられました。

にぎやかな親戚たちも元の生活に戻り始めたお正月休み明けの昨年1月12日朝、かたくなに自宅で過ごすことを望んでいたトヨさんが家族を見送った後、自ら病院へ行くといいました。本人と家族の納得の上で病院へ行くことを決め、私がK先生に連絡を取り、救急外来を受診、病院側の素早い手配のおかげで即日入院となりました。

入院後のトヨさんは状態も落ち着き、穏やかな日々を過ごされていることをK先生がEメールで報告してくれました。

「順調に行かずに残念でしたが、それでもトヨさんはとても頑張った方だと思いますよ。体調悪化に対する不安を乗り越えるのは並み大抵のものではないと思います。それを克服するのに必要なのは自分の病気に対する理解と強い意志、それに周りの方々の協力だ

「急変する前の最後の晩に、ご家族と話し合う機会があったのですが、決して恵まれているとは言えない医療環境や介護事情にも関わらず、ここまで穏やかに過ごすことができたのは竹内さんのおかげですとおっしゃっていました。トヨさんにはたくさんのお力を学ばせていただきました。トヨさんのことは一生忘れられない患者さんになると思います。竹内さんには長い間、たくさんのお力添えをいただきとても感謝しております。本当にありがとうございました」

医師からこのようなお手紙をいただき、トヨさんご家族との約1年半の「キャンナス」としての関わりは、本当に看護師冥利に尽きると何度も目頭が熱くなりました。

穏やかな表情で自宅へ戻ったトヨさん。ぜひ竹内さんも一緒にやっただけませんか、家族ととともにお通夜の前の湯灌(かん)をさせていただきました。ぎりぎりまで過ごすことのできた大好きな自宅の畳の上で、たくさんの子供たち、家族に囲まれながら身体を清めて白装束を身につけたトヨさんの姿は、立派に人生を締めくくる人としての姿を私たちに示してくれ、家族の絆の大切さや、今後の私に地域看護の課題を投げかけてくれたように思います。

地域看護とはまさにこのように患者や家族、そして医師、看護師とが、強い絆と信頼関係を持って連携することで初めて成り立つことを、トヨさんに教えられました。医療過疎、医師不足の叫ばれる昨今において、たとえ近郊に医師がいなくても、K先生はトヨさんにとっての「ホームドクター」であり、私が多少なりとも「ホームナース」となって、その手助けができたのかも知れません。医師も看護師も、心から地域の人に頼りにされ、必要とされる存在でありたいものです。

連載8 漁業者家族の看取り(後編)
ホームナースの役割

連れすることがトヨさんや家族にとって良いことなのでしょうか。あるいは万が一一心停止してしまったとしても、ご家族の見守る中で落ち着いてから、私がご家族と一緒に病院へお連れする形もあるのではないかと思います」と相談してみたのです。

先生は、「私の考える理想も自宅で最期を迎えることだと思います。竹内さんのお考え通り、万が一最期の時が来たとしても、落ち着いてから病院に来ていただくので良いと思います」と言いつつも、北海道の人は最期は病院で迎えるのが当然と考える人が多く、在宅死に抵抗感が強い、という調査結果の新聞記事を例に挙げ「どのように看取るか、まずはご本人と家族の受け入れ次第ですね」というお返事をいただきました。

家族で話し合った結果、在宅での看取りは家族としては自信がないこと急変時の搬送は救急車ではなく、自家用車で連れて行ってあげたいこ



ナースキャップ(切り絵作家みたまゆこ氏の作品)

と思います。トヨさんの場合、未告知なので病気に対する理解はともかくとして、自分の体調変化に対する洞察力に長(た)けており、強い意志も持ち合わせていますし、周りのご家族の理解にも恵まれていたほうだと思います」

そんな連絡から数日たった1月29日の夜、夕食を娘さんの介助でいつも通り取って就寝したトヨさんは、夜中に容態が急変、ご家族に見守られながら30日の朝、永眠されました。

K先生からのお手紙です。